37）確定診断が極めて困難であった皮膚腫瘍の髄膜転移症例

菅野　三信・荒井　啓晶・金子　宇一（帯広第一病院 脳神経外科）

今回我々は皮膚癌の髄膜転移と考えられる症例で，髄膜腫との鑑別が困難であった症例を経験したので報告する．

症例は60才の女性で，痙攣発作で入院．1年前に子宮癌で切除術を施し放射線治療を受けていた．翌年，右側頭部の頭皮の腫瘤に対し放射線療法を施行し，消失した．

術前の CT，脳血管撮影の結果，子宮癌の転移性脳腫瘍と考えていたが，手術所見では硬膜と強く癒着し肉眼的には髄膜腫と診断しなおした．ところが組織診断では皮膚癌からの転移性脳腫瘍であった．このように診断が，2転，3転とした鑑別の困難であった症例を呈示し，若干の文献的考察を加えて発表する．

38）気管支カルチノイド腫瘍の脳転移を思わせた多発性脳腫瘍の1例

中村　公明・斎藤　和子・高橋　保博・田中　輝彦（青森県立中央病院 脳外科）

症例は58才の男性，右動眼神経麻痺と頻発する左半身痙攣を主訴とし既往歴に右肺中葉に 4 cm 大の腫瘤を指摘され S 59年11月24日右肺中葉切除術を受けており病理診断は small cell cancer と cartinoid の混在した腫瘍であった．現病歴は S 60年12月20日突然の左半身痙攣があり，さらに左眼瞼下垂があり当科入院となった．頭部 CT で右頭頂部，右側頭部，左側頭部，左小脳半球部に多発性 mass を認め，肝，脾にも mass を認めた．血中 CEA，セロトニン，カルシトニン尿中 5－HIAA の上昇を認めた．S 61年2月14日開頭腫瘍摘出術を施行した．病理診断は small cell cartinoma と cartinoid の混在した像を呈し組織中に高濃度のカルシトニン，CEA，セロトニン，が含まれていた．

39）経過より菌状息肉症の脳転移も考えられた1例

齋藤　和子・中村　公明・高橋　保博・田中　輝彦（青森県立中央病院 脳神経外科）

53歳，男．48年，全身の皮膚に紅斑，扁平隆起出現，菌状息肉症として，治療を続けていた．60年4月末，左頸部に腫瘤が認められ，生検の結果，濾胞性大細胞型リンパ腫と診断され，COP 療法，放射線療法を受けた．7月，激しい腹痛と発熱があり，精査の結果，回腸部の腫瘍の診断で，CHOP－Bleo 療法を受けた．12月末，頭痛，呕気，61年1月初旬，右片麻痺が出現，CT スキャン等で，左側頭葉及び脳梁に腫瘍を認め当科入院．2月5日開頭手術を行い，腫瘍を亜全摘した．組織型は，びまん性大細胞型リンパ腫，B－cell lymphoma であった．菌状息肉症として治療中，二次的に発症した扁桃初発の B－cell lymphoma が脳内に転移したと思われる1例を報告した．

40）大腸癌脳転移症例の検討

船木　昇・石倉　彰（国立金沢病院 脳神経外科）

我々は，CT 導入後45例の転移性脳腫瘍を経験した．その中で最近2例の大腸癌脳転移症例を認めた．

〔症例1〕78才女性，上行結腸癌にてバイパス手術施行．意識消失発作，右不全片麻痺のため当科受診．CT 上左側頭葉に腫瘍を認めた．手術により脳実質転移が確認された．経過順調である．

〔症例2〕60才女性．S 状結腸癌（Linitisplastica 型）にて直腸切断術施行．術後50日目に左上肢に痙攣発作あり，CT にて右前頭葉に腫瘍を認めた．手術により脳転移と診断された．経過良好である．

両者とも血管撮影上腫瘍陰影はなかった．単発転移であり，他に遠隔転移を認めなかった為，手術適応ありとした．CEA 値は，両者とも上昇していた．

41）Pineal region metastatic tumor の1例

関口賢太郎・西沢　英二・平林　賢一・山中　龍也・森井　研・佐藤　進（山形県立中央病院 脳神経外科）

松果体への癌転移に関する報告によると，癌症例の剖検脳において低頻度ではあるが稀ならず松果体転移巣が発見されている．我々は pineal region tumor の臨床所見を呈し転移性腫瘍と確認された63才男性例を経験したので報告する．頭痛を訴え来院．parinaud 症候がみられた．CT では pineal region にやや high density の tumor と脳室拡大が認められた．血中髄液中 CEA は高値を示し，全身検索により胃癌が発見された．全経過3カ月で死亡したが，剖検により第3脳室後半部腫瘍は metastatic tumor と確認された．松果体の既存構造は殆んど消失し腫瘍に置き換えられていたが，松果体由来の calc が腫瘍内に残存しており，本例は癌の松果体転移例と考えられた．